

# 『天地瑞祥志』から見た『山海経』の受容と伝播

劉\* 捷

要旨

七世紀の中葉に新羅で編纂された『天地瑞祥志』は、かつて、朝鮮ならびに日本の読書人に広く受け入れられた書物である。その内容は、天地の間に存在するさまざまな符応に関する知識を収集した類書であり、時代が異なり、性質も異なるさまざまな古典文献を引用している。そのうち、動物の符応に関する「禽物載」と「怪物載」においては、『山海経』という特別な先秦文献が極めて大きな役割を果たしている。『山海経』に登場する奇妙な形状や習性を持つ「怪物」たちは、『天地瑞祥志』において政治的な機能を有する「瑞祥」と見なされ、核心的な資料として各項目の記載内容を支えている。基本的に中国の典籍を引用して編纂された書物であるが、『天地瑞祥志』の『山海経』や儒学についての観点は、同時代の中国の学界のそれと明らかに異なっている。すなわち、朝鮮の『山海経』学者は、魏晋時代の郭璞や酈道元のように自然主義の観点から『山海経』を研究することはなく、劉向、劉歆といった漢代の学者と同様の符応の思想を取り入れ、中国の学者によって動物と見なされた「鳥獸」を、国家の命運を左右する「瑞祥」とした。その原因として、一つには、朝鮮の儒学が災異祥瑞に対して強い関心を持っていたということ、二つには、『山海経』は災異符応を含み、かつまた正確に朝鮮地理を記述しているという理由によって、朝鮮において早くから正統的な地位を確立していたということが考えられる。それゆえ、『山海経』に記録されている「怪物」は、『天地瑞祥志』においては「科学的」な知識として扱われた。この書に対する研究は、『山海経』と朝鮮との様々な関係を見出し、中国と朝鮮の文化交流史における新しい章を書き加えることを可能にし、また書中に見える符応思想に着眼して、東アジア文化圏における思想や文化の伝播についても研究することができる。

## はじめに

『天地瑞祥志』は日本に伝存する逸存書であり、現在三種類のテキストが知られている。前田育徳会尊経閣文庫貞享三年（一六八六年）の抄本、京都大学人文科学研究所蔵昭和七年（一九三二年）の抄本、石川県金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵文化七年（一八一〇年）の抄本である。そのうち加越能文庫本は十五行のみであり、京都大学本は最も古い尊経閣文庫本を抄写したもので、文字は明析であり、欄外の注記も添えられている。それ故、現在中国で影印刊行されている『天地瑞祥志』は、いずれも京都大学昭和七年本に拠っている。

本書冒頭の「啓」によれば、本書は唐高宗麟徳三年（六六六年）、「大史薩守真」<sup>2</sup>によって執筆された。しかし、中国の史書は「薩守真」なる人物についていかなる記述もとどめていない。また『隋書』経籍志、『旧唐書』経籍志、『新唐書』藝文志などの書目にも『天地瑞祥志』なる書名は見えない。これに対して朝鮮王朝期の鄭麟趾『高麗史』、ならびに日本平安期の『日本国見在書目録』、『通憲入道藏書目録』には『天地瑞祥志』が著録されている。

本書の成立や伝播など一連の様々な問題について、これまで各国の研究者たちが多方面にわたって探究してきたが、結論の出ていない問題もある。水口幹記氏と陳小法氏は、『天地瑞祥志』の内容と日本での伝播について詳しく紹介した<sup>3</sup>。中村璋八氏は、本書が九世紀以降、日本の統治階層、とりわけ陰陽師に受容された状況について論じている<sup>4</sup>。そうしたなか議論が集中したのは、著者についてであり。游自勇、太田晶二郎氏をはじめとする研究者たちは唐朝の人であるとし、趙益、金程

\*中国山東大学儒学高等研究院

宇氏をはじめとする研究者たちは新羅の人であるとしている。いま諸説を勘案すると、本書には著者を唐朝の人ではなく新羅の人であると考えべき、多くの証拠がある。たとえば、麟徳なる年号は二年を以て、乾封に改元されており、「麟徳三年」は実際には存在しない。また「大王殿下」へのいわゆる上行文書を「啓」と称することは唐朝の制度とは異なる。さらに著者は盟約について言及する際、唐朝の盟約ではなく、とくに新羅と百済が締結した「就利山盟約」を例としている。加えて、唐の皇帝の実名を避諱することなく、諱名をそのまま用いている。以上のような理由により『天地瑞祥志』という書物は新羅人の編纂にかかり、朝鮮ならびに日本の読書人に広く受け入れられた書物であると考えることができる。なおかつ中国の典籍を引用して漢語によって執筆されたこの書物は、中国の思想が東アジアの中華文化圏において、どのように受容され、いかに伝播したのかという歴史を具体的に表している。こうしたことを前提にして考えると、『天地瑞祥志』の各篇各章において引用された典籍を整理・研究することによって、時代を異にし、性質も異なるさまざまな古典文献の唐初における受容の状況、ならびにそれらと「瑞祥」文化との関係についても考察することができる。さらにまた、長きにわたり議論がされつくしている感のある『山海経』が本書において与えられている特別な位置づけについても、文献学や思想史など様々な角度から子細に検討すべき価値があるのである。

## 一 『山海経』の引用

『天地瑞祥志』はしばしば、天文に関する書物と見なされるが、この本の内容は実際には多方面にわたる。合計二十巻で構成される本書の内

容は以下の通りである。首巻は総論で、巻二は天地人三才、巻三は「三光」、巻四と巻五は二十八宿、巻六と巻七は星官、巻八は流星、巻九は客星と彗星、巻十は暈と雲氣、巻十一は雷電、巻十二は風雨、巻十三は夢、巻十四は謠言や魂魄など無形なもの、巻十五は植物、巻十六は五行と月令、巻十七は住宅と器物、巻十八は禽類、巻十九は獸類、巻二十は祭祀について述べている。このうち現在伝存しているのは第一、七、十二、十四、十六、十七、十八、十九、二十巻のみである。

右に示したように、本書の内容は天文・地理・気象・占夢・妖怪・鳥獸・植物・器物などの方面にわたり、天地萬物、含まないものはない。実際、薩守真は、「啓」において、本書を百科全書的な書物にするという編纂方針を明言している。彼が継承しようとしたのは、殷の巫咸、周の史佚から魏晋時代の陳卓、韓楊に至る先人達が従事してきた「天地災異の占を修める」という事業であり、それゆえ、「広く諸家の天文を集め、凶讖災異を披覽」し、「言は陰陽に涉り、義は瑞祥を開き、織分の悪も隠すこと無く、秋毫の善も必らず陳べる」という目的を達成することを企図した。本書全体の構造から見れば、著者はまず「五行、瑞祥、天文ならびに、もはや周辺化していたとも言える数術をあわせて融合し」<sup>10</sup>、最終的に「天文、地象、人事のそれぞれに関する瑞祥を分類整理した一種の類書型の書物」<sup>11</sup>を編纂することを目指したと考えられる。

このような天地萬物の符應現象を總和した体系的書物においては、各巻の異なった内容に応じてそれぞれ特殊な専門的文献が引用されている。たとえば、四十六内官や九十一外官という星官について述べる第七巻では、甘徳、石氏、郝萌、巫咸といった史官や『漢書』天文志、『晋書』天文志、『黄帝占』などに見える占星術に関する文献が引用されている。また五行と月令について述べる第十六巻では『礼記』月令のほか、

『尚書』洪范、『漢書』五行志、『晉書』五行志、『京房易伝』など陰陽五行説に関する書物が引用されている。祭祀の儀礼について述べる第二十卷では『礼記』、『周礼』、『大戴礼記』、『尚書』、『孝経』といった文献が引用されている<sup>12</sup>。同様に第十八卷「禽物載」、第十九卷「獸惣載」では、鳥獸の瑞祥に関する記述が多い『山海経』が特別に重要な書物として位置づけられている。いま、この両卷における各引用書の引用頻度を調べてみると、以下の通りになる。

第十八卷	
引用書	引用回数
爾雅	22回
山海経	17回
漢書	15回
瑞應図	14回
京房易伝	14回
礼記	13回
方言	11回
説文	10回

第十九卷	
引用書	引用回数
瑞應図	27回
京房易伝	19回
山海経	15回
爾雅	15回
説文	11回
漢書	9回
抱朴子	9回

確かに、引用回数について見れば『山海経』は最多ではない。『山海経』の価値を具体的に表しているのは、『天地瑞祥志』の各項目の内容を支える唯一の重要資料としての存在意義にある。

すなわち『天地瑞祥志』の第十八卷はあわせて七十四項目からなり、十七項目は一種類の資料のみによって構成されている。そのうち『山海経』のみを資料として構成されているのは、すなわち號、跂踵、潔鉤、梟溪、酸與、蜚鼠、鸚鳩、勝遇、鵠、鵠、鵠の十一項目<sup>13</sup>である。また『山海経』は鳳凰、大鶚、鵠、鵠、魚（鱈魚、螺魚）の項目においても引用される。つぎに第十九卷はあわせて四十二項目からなり、十三項目は一種類の資料のみによって構成されている。そのうち『山海経』の

みを資料として構成されるのは八項目<sup>14</sup>、すなわち狡、狸力、長舌、猾、朱厭、玃、朱儒、蜚である。また獸（駁、辣、隄、駉）、馬（乘黄）、麋、猯、龍（燭龍、肥遺）、蛟螭の項目においても、『山海経』の内容が引用されている。つまり『山海経』は『天地瑞祥志』の第十八、十九卷において、『爾雅』、『瑞應図』、『京房易伝』といった文献では代替することができない役割を果たしている。とりわけ「跂踵」、「勝遇」、「狸力」、「朱厭」に関する唯一無二の記録によって、『山海経』は動物の符応についての空白状態を埋めあわせ、類書としての『天地瑞祥志』の内容を豊かにする貢献をしている。

『天地瑞祥志』に引用される『山海経』の内容について見ると、『山海経』と『海経』という両部份を引用しているが、もっぱら鳥獸に限定し、『山海経』に見える方位、草木、鉱物、山神の祭祀に関する記述、さらには『海経』に見える遠国や異人についての『海経』の記述は引用されていない。しかも「見るれば則ち天下に大旱あり」、「見るれば則ち郡縣に大水あり」といった符応の意味を有する記述だけが引用されており、狂狂や瞿如といった符応の意味を持たない鳥獸は一切引用されていない。その理由は『天地瑞祥志』という書物の性格に由来する。すなわち『天地瑞祥志』は祥瑞、災異に関する知識を収集した類書であり、それらに関係のない内容は収録する必要がないのである。さらに、引用文が『山海経』の原文とは食い違っていることがあるが<sup>15</sup>、その原因は伝抄過程における誤写による可能性も、また依拠した版本が異っていた可能性も考えられるが、これについては知ることができない。しかし瑞祥に関する記述は『山海経』の記述を極めて完全に保存している。「潔鉤」を例にとると、『天地瑞祥志』は「礪山に鳥有り、其の状は鳧の如くにして鼠毛、善く木に登る、其の名を潔鉤と曰ふ、見るれば則ち国に疫多

し」とあり、『山海経』の原文は「又南五百里を礪山と曰ふ、南のかた礪水に臨み、東のかた湖澤を望む。獸有り、其の狀は馬の如くにして羊目、四角、牛尾、其の音は獬狗の如し、其の名を菽菝と曰ふ。見るれば則ち其の国に狡客多し。鳥有り、其の狀は鳧の如くにして鼠尾、善く木に登る、其の名を潔鉤と曰ふ、見るれば則ち其の国に疫多し」である。「菝菝」に関する記述がないこと、「潔」が「絜」となっていること、これらの相違を除き、「礪山」という地点、「鳧の如くにして鼠尾」という外貌、「善く木に登る」という習性、「絜鉤」という名称、「見るれば則ち国に疫多し」という災異現象などにおいて、『山海経』の記述とほぼ一致している。つまり、「符応」についての記述を中心として、地点、外貌、習性、名称、符応現象を述べることが『天地瑞祥志』の不可欠な内容であるが、そもそもそれらは『山海経』の記述対象なのである。また『山海経』では『山経』だけに限っても、「大穰」、「土功」、「大水」、「大兵」などの祥瑞や災異を引き起こす動物を合計五十一種数えることができ、『山海経』全体では遥かにこの数字を上回る。そのため『天地瑞祥志』は「魚」、「獸」、「馬」、「龍」という一般的な項目においても、「鰐魚」、「駮」、「乘黄」、「肥遺」など『山海経』の内容も十分に引用している。そうすることによって、既知の祥瑞を最大限に収集しているのである。

動物の符応現象に関する記載の宝庫とも言える『山海経』は、何故『瑞應図』、『晋書』五行志など符応を記す文献に引用されず、『天地瑞祥志』に引用されているのであろうか。この疑問に答えるキーポイントは、時代や思想的文化的背景が異なる人々が異なる仕方です。『山海経』を受容した、ということであろう。

## 二 『山海経』の受容

『山海経』には奇妙な形や習性を持つ「怪物」が数多く記載されており、興味津々と議論される対象であるとともに、敢えて言及の対象とされないこともあった。『山海経』の性格に関する議論は、『天地瑞祥志』が書物として登場する以前から、すでに行われていた。『漢書』芸文志は、この書物を『宮宅地形』、『相人』、『相六畜』などの書物とともに術数略の形法家に著録している。これに対し、『隋書』経籍志は『水経』、『風土記』、『交州異物志』などの書物とともに史部の地理類に著録している。つまり『天地瑞祥志』は『隋書』経籍志以後の書物であるが、『山海経』に対する見方はむしろ『漢書』芸文志に近い。

その『漢書』芸文志の見方は劉歆父子の見解を受け継いでいる。なかでも劉歆の『山海経』中の怪物に対する見方は当時において最も明確にして代表的な考えであった。劉歆は「上山海経表」において、禹や益などは「内は五方の山を別ち、外は八方の海を分かち、其の珍寶奇物、異方の生ずる所、水土草木、禽獸・昆蟲・麟鳳の止る所、禎祥の隠るる所を紀」したと述べている。また漢宣帝の時、父親の劉向が『山海経』によって石室の中の人物が「貳負の臣」であることを識別したため、「朝士是に由りて『山海経』を奇とする者多く、文學大儒、皆讀み學びて以て奇とし、以て禎祥・變怪の物を考へ、遠国・異人の謠俗を見る可し」という状態になったと述べている。まさに『禮記』中庸に「国家將に興らんとすれば、必ず禎祥有り、国家將に亡びんとすれば、必ず妖孽有り」とあるように、劉歆は「禎祥」はたんなる吉兆ではなく、国家の運命を左右する兆しであると強調している。一県、一邑、一国のみならず、天下の吉凶を示すことができる『山海経』の中の鳥獸はこのような符応の

定義と符合している。そのため『山海経』は「其の声気の貴賤、吉凶を求める」<sup>17</sup>という形法家の書物として著録されたのであり、天人感応、陰陽災変の理を究明していた漢代の儒生<sup>18</sup>から高く評価されたのである。

『天地瑞祥志』の著者もこうした見解を受け入れたことは間違いない。「啓」には「瑞祥」とは「吉凶の先見、禍福の後応は、猶お響の空谷に起き、鏡の質形を写すがごときなり」<sup>19</sup>とある。このような「瑞祥」に正確に対応する最も良い例は「殷主躬ら責むれば、甘雨流潤し、周王自ら咎むれば、嘉禾反風す」<sup>20</sup>という聖王の政治であり、著者がこの書物において提示した内容は、要するに君主の長久なる統治を補佐するためのものであった。まさにこうした編纂意図に基づき『山海経』に記録された鳥獣が、あらためて符応学説の知識体系にとりこまれ、さらに「瑞祥」として再び統治階層と讀書人に注目されることとなったのである。

上述の如く『漢書』芸文志は『山海経』を術数略の形法家に著録し、符応占驗の書と見なしているが、一方で山川地理に関する詳細で確実な記述が大量に含まれており、古来より地理書と見なされ続けている。後漢の明帝はかつて、治水の命令を下した王景に『禹貢図』、『河渠書』とともに『山海経』を賜与したが<sup>21</sup>。この事実は、後漢時代の人々がすでに『山海経』を地理書と見なしていたということを示している。北魏に至り、酈道元はその『水経注』において、生水、丹水、陽華山、諸次山などの多くの箇所でも『山海経』の記述を引用している。とくに崑崙、積石をはじめとする黄河の源に関する地理知識については、これを最も確実な「情報」として位置づけ、『山海経』の記述を現実な地理と結びつけた。さらに、唐初に成立した『括地志』においても、こうした態度を継承している。たとえば崑崙山は肅州酒泉県に、三危山は沙州敦煌県に、鳥鼠山は渭州渭源に<sup>22</sup>、それぞれ位置したとして、『山海経』に記録されている「伝

説世界」をつぎつぎと現実のものとして、唐朝の版図と符合させている。こうした経緯により、唐代に成立した『隋書』においては『山海経』は当然地理類の著述と見なされることになる。

記載の真実性を肯定するという前提に立てば、五方の山川を基軸として記述する『山経』と遠国異人を主要な内容とする『海経』は明らかに地理書の規準に合致している。山川の間に存在する怪物に至っては、地理学の角度から見れば各地固有の存在、即ち自然界にもともと生息する動物ということになる。このように一種の自然主義の観点から『山海経』を認識しようとする態度が、後漢から唐代における讀書人の『山海経』に対する見方の主流であった。それについては魏晋南北朝期の玄学思想が重要な作用を果たしたと考えられ、この点は郭璞の『山海経』の研究によってもよく分かる。郭璞は『天地瑞祥志』が引用する跋踵、勝遇、狸力、朱厭といった『山海経』における代表的な鳥獣について、「怪物」であるとすると評価について反駁している。すなわち『注山海経敘』において、「何となれば物は自ら異ならず、我を待ちて後に異なる。異は果たして我に在り、物の異なるに非ざればなり」、また「夫れ習見する所に翫れて、希に聞く所を奇とするは、此れ人情の常蔽なり」、さらに「夫れ宇宙の廖廓たる、群生の紛紜たる、陰陽の煦蒸たる、萬殊の區分せるを以て、精氣渾淆し、自ら相い噴薄し、遊魂靈怪、象に觸れて構へ、形を山川に流し、状を木石に麗くる者、悪んぞ言ふに勝ふ可けんや」と指摘している。つまり、怪しい外貌も奇特な効力も、人間の狹隘な認識が本来の自然を切り裂いた結果であり、こうして種種の「少見多怪」を造りあげたというのである。このような観点を持つ人は決して郭璞だけではなく、魏晋以降、玄学思想に啓発された自然主義的な風潮により、『山海経』の内容はしばしば当時の博物書に引用されることとなった。「神

異経』における騶兜と窮奇、『博物志』における精衛と肥遺などは、珍奇と博学を尊ぶ当時の気風のもと、『山海経』における怪物の真实性を肯定している例である。唐初の学者たちの『山海経』の鳥獸に対する見方も、魏晉のそれを踏襲していた。例えば武徳七年（六二四年）に成立した『芸文類聚』では、精衛が「鳥部」に、吉疆（吉量）、九代、乘黄、駒駘、蝮犬、駮、九尾狐、白猿、猩猩が「獸部」に、燭龍、蛟、巴蛇、長蛇、肥遺が「鱗介部」に記録されている。以上の動物は、『天地瑞祥志』においては、その全てが明らかに「瑞祥」として記載されている。注目すべきは、『芸文類聚』には、「祥瑞部」、「災異部」といった符応の知識を専門に記載する章節も設けられているが、『天地瑞祥志』が「瑞祥」であると見なす駮、乘黄、燭龍、肥遺など多くの『山海経』の内容を単に「鳥部」、「獸部」、「鱗介部」に記録している。こうした扱いによって、『山海経』の「怪物」を単なる「水土草木禽獸昆蟲鱗鳳の止る所」と見なし、「それらが禎祥の隠るる所」であることを否定しているのである。一般的な知識を総合した類書としての『芸文類聚』における文献の引用や分類は、当時の読書人のこうした内容に対する常識的な見方を反映している。すなわち、『山海経』の内容は禎祥ではなく、博物類に分類されていたのであり、これによって、この書がどのように位置づけられていたのかも分かるのである。

要するに、唐代読書人による『山海経』の受容の仕方と比べると、『天地瑞祥志』のそれは明らかに異なっている。『天地瑞祥志』の著者が幅広く中国の文献を涉獵し、大量に引用していることからすれば、彼が魏晉以来自然主義の思潮を認識していないとは考えられない。『天地瑞祥志』において、「麋」と「蛟」に関する描写は、多くが『山海経』の原文ではなく郭璞の注釈によっている。このことから分かるように、薩守

真は郭璞の『山海経』に対する研究について充分理解したうえで、あくまで『山海経』の中の鳥獸の符応機能を顕彰しようとしているのである。しかし彼の『山海経』に対するこうした認識はたんなる復古ではない。『山海経』の朝鮮半島における伝播の歴史とその知識体系の中で与えられた特殊な地位こそ、『山海経』の「怪物」が政治的な機能を有する「瑞祥」と見なされた理由なのである。

### 三 符応思想と朝鮮文化

『山海経』が書物として成立したのは先秦時代であるが、朝鮮半島に伝わったのも相当に古い時代のことである。『和漢三才図会』によれば、晋の太康五年（二八五年）、百濟は『易経』、『論語』、『孝経』などの中国古典とともに、『山海経』を日本へ進貢した。したがって、『山海経』が朝鮮に伝わったのは、その二八五年以前でなければならぬ。さらに、『高麗史』、『朝鮮王朝実録』にも、『山海経』などの古典が、高麗時代に朝鮮半島へ伝えられたという記述がある。つまり、朝鮮半島における『山海経』の受容と伝播は、郭璞が『山海経』について筋道だった研究と注解を行った時より以前に、目立たない形ですでに始まっていたのである。しかも、この間の歴史は、百濟において、『山海経』が古くから、『易経』、『論語』、『孝経』などの古典と同様に、王朝権力からその重要性を認められていたということを物語っている。司馬遷が「敢えて言わず」としか評価しなかった書物が、何故、この時の朝鮮では肯定的に評価される經典となり、さらには他国へと進貢されることにもなったのであろうか。恐らくそのもつとも決定的な理由としては、儒学が朝鮮半島に流入する過程で、符応思想が単にそのまま残存しただけではなく、以下に述べるよ

うに、朝鮮固有の宗教文化によって一層強固なものとなったという状況があったと考えられよう。

まず、中国側の史料によれば、新羅統一以前、朝鮮半島においては、長期にわたり鬼神信仰が根強く広がっていた。『後漢書』東夷列伝には、「高句驪は、遼東の東千里に在り、……好んで鬼神、社稷、靈星を祠り、十月を以て天を祭り大いに会し、名づけて東盟と曰う」とある。また『晋書』四夷列伝には、「馬韓は、山海の間に居り、……俗は鬼神を信じ、常に五月の耕種の畢るを以て、群聚歌舞して以て神を祭る。十月の農事畢るを以て、亦た之の如くす。国邑ごとに各おの一人を立てて天神を祭るを主さざらしめ、謂いて天君と為す」とある。さらに『旧唐書』東夷列伝には、「新羅国、本の弁韓の苗裔なり。……好んで山神を祭る」とある。これらは、いずれも当時の中国の読書人の立場から朝鮮文化に対して行つた評価であり、当然、そこには宗主国としての文化的な優越感が含まれているが、同時に、中国と朝鮮の文化的な差異を客観的に反映していることも確かである。

次に、符応思想が政治上において利用されるという点について言えば、朝鮮の史書には常にそうした記述がなされている。『三国史記』高句麗本紀第一には、「(高句麗琉璃明王二十九年夏六月) 矛川上に、黒蛙の赤蛙と群斗すること有り。黒蛙勝たずして死せり。議する者曰く、黒は北方の色なり。北扶餘、破滅するの徴なり、と。」ある。『三国史記』高句麗本紀第二は、「(大武神王三年冬十月) 扶餘王帶素、使いを遣わして赤鳥の一頭二身なるを送る。初め、扶餘人、此の鳥を得てこれを王に獻ぜり。或ひと曰く、鳥なる者は黒なり。今変じて赤と為り、また一頭ににして二身なり。国を併するの徴なり。王、其れ高句麗を併せんか、と。帶素、喜んでこれを送り、兼ねて或る者の言を示せり。王、群臣と議す。

答えて曰く、黒なる者は北方の色なり。今変じて南方の色となる。また赤鳥鳥は瑞物なり。君得てこれを有せずして以て我に送れり。两国の存亡、未だ知る可からざるなり、と。帶素、聞知して驚悔せり」とある。『三国史記』新羅本紀第五には、「(善徳女王五年) 五月、虾蟆、宮西の玉門池に大いに集まる。王これを聞き、左右に謂いて曰く、虾蟆、目を怒らせるは、兵士の相なり。吾嘗て聞く西南辺に地有りて玉門谷と名づく。潜かに其の中に入れるか、と。乃ち將軍閔川に命ぜり。果して百済の將軍于召、独山城を襲わんと欲し、甲士五百人を率いて来りて其の処に伏す。閔川、掩撃して尽くこれを殺せり」とある。以上のような出来事が、高麗の開国当初から朝鮮半島の三国鼎立が終結する直前の新羅時代に至るまで、数百年続いているのである。「黒蛙」、「赤鳥」、「蝦蟆」などの動物が国家の運命を象徴し、また将来の事柄を予兆する符応となっている。かりに上掲三例のうち、前の二例は、ともに読書人による符応解釈であるとすれば、最後の新羅・善徳女王が予兆として理解したことは、当時の支配階層が符応思想を完全に信じ、人々の行為や判断を左右する一種の文化的特徴となつていたことを示している。

最後に、符応思想を特徴とする中国の書物が朝鮮に伝えられた例としては、決して『山海経』が唯一の例ではないということ指摘しておきたい。『南史』夷貊列伝下には、「(元嘉) 二十七年、毗、上書して方物を獻ぜり。私かに台使の馮野夫に西河太守を仮し、表して『易林』、『式占』、腰弩を求めしむ。文帝並びにこれを与う」とある。このうち『易林』と『式占』は、ともに占卜術数類の文献である。『易林』は言うまでもなく、『周易』に起源する書物であるが、『隋書』経籍志は、「五行家」に著録し、『四庫全書』は子部術数類の「占卜の属」に著録している。いずれも『山海経』が、『漢書』芸文志の術数略の「形法家」に著録されている状況と似通っ

ている。百済王・余毗が、一国の王として、南朝・宋の文帝に対し、上表してこれらの書物を求めたことは、陰陽五行や符応占卜に関する知識が朝鮮半島においては極めて重要な地位を占めていたことを示しているのである。

要するに、天人感応を核心とし、讖緯符応の学を基礎とする漢代の儒学理論の体系が新しい思想に取って代わられた時、神学的色彩を帯びた儒家の理論は朝鮮半島に当初から存在していた先祖崇拜、天神崇拜、自然神崇拜などの文化と次第に融合して、統治階層ならびに知識人層がともに積極的に崇拜する中心的思想になったのである。そのような思想史における地域間の差異が、『天地瑞祥志』が誕生したその時代において、唐朝と新羅の学者たちに同一作品の内容に対して全く異なる解説を行わせたのであった。

これとは別に、『山海経』に記載された朝鮮半島に関する記述が正確であるために、この書の「真实性」が「経典」同様に肯定されることにもなった。『山海経』の中で朝鮮半島に関する記述は次のとおりである。

- 蓋国は鉅燕の南・倭の北に在り。倭は燕に屬す。(海内北経)
- 朝鮮は列陽の東海・北山の南に在り。列陽は燕に屬す。(同右)
- 列姑射は海の河州中に在り。姑射国は海中に在り、列姑射に屬し、西南に山之を環る。(同右)
- 都州は海中に在り。一に曰く、郁州と。(海内東経)
- 琅邪臺は渤海の間、琅邪の東に在り。其の北に山有り。一に曰く、海間に在りと。(同右)
- 韓雁は海中に在り、都州の南なり。(同右)
- 東海の内、北海の隅に、国有り、名けて朝鮮と曰ふ。天毒は、其の

人水居す。人に俛より、人を愛す。(海内経)

これらのうち、蓋国については、郝懿行『箋疏』は『魏志』東夷伝の「東沃沮は高句麗の蓋馬大山の東に在り」との記述を引用している。蓋国とはすなわち朝鮮半島の蓋馬平原で、遼東半島(燕)の南、日本の北に位置する。これについて郭璞は「朝鮮は今の樂浪県にして、箕子の封ぜられし所なり。列も亦た水名なり。今、帶方に在り。帶方に列口県有り」と注をしており、朝鮮、列陽いずれも今の朝鮮半島に属する。また郭璞「注」に「(列姑射は)山名なり。山に神人有り。河州は海中に在り、河水の経る所は、『莊子』の所謂、藐姑射の山なり」とある。海河州は古黄河の河口、すなわち現在の渤海にあり、列姑射は膠東半島と朝鮮半島の間にある一連の島である。また『海内東経』に記載された地名について、郭璞「注」には「(都州)今、東海胸臆の界に在り」とあり、郝懿行『箋疏』には「琅邪臺は今沂州府に在り、其の東北に山有り、蓋し勞山なり。勞山は海間に在り、一に牢山と曰う」、「韓雁は、蓋し三韓の古国名なり。韓は三種有り、『魏志』東夷傳に見ゆ」とある。つまり都州は今の連雲港、琅邪臺は膠東半島の南部にあり、韓雁と海を隔てて向かい合っており、かつての昔朝鮮半島南部の三韓に属する。最後の「海内経」に記載された「朝鮮」とは中国の東北方の樂浪にちがいがなく、今の朝鮮半島の北部の地である。

『山海経』のこうした記述を通して、朝鮮半島の地理を、明確に把握することができるといえる。「鉅燕の南、倭の北」と「東海の内、北海の隅」にあたる地域に、北から南に向かい、遼東半島と境を接している蓋国、列陽の東にある朝鮮、渤海にある列姑射、連雲港と海を隔てて向かい合う韓雁が順に位置していたのである。東北アジアにおける歴史地理学の知



識と対照すると、これらの記載は依拠するに足る確実なもので、理にかなっている。『山海経』全体から見ると、朝鮮についての内容は、極めて特別な意味を有している。すなわち、『山海経』には荒唐無稽な記載が大量にあり、「人首にして三角あり」の戎、「龍身にして人頭」の雷神、「馬蹄にして善く走る」釘霊国の民などについての記述が随所に散見している。これとは逆に、朝鮮半島地理に関する記述は現実的な内容で、荒唐無稽な記載が一切ない。他方、『海外南経』、『海外西経』、『海外北経』、『海外東経』、『海内南経』、『海内西経』、『海内北経』、『海内東経』、『大荒東経』、『大荒南経』、『大荒西経』、『大荒北経』、『海内経』からなる『海経』部分では、朝鮮に関する内容はすべて「海内」に属し、『山海経』が書物として成立した時点において、朝鮮はすでに禹跡が及ぶ所、九州の渉る所であり、華夏文明の版図の不可欠の一部分であった<sup>23</sup>ということを示している。これは単に周の武王が箕子を朝鮮に封じたという『史記』の記載<sup>24</sup>と符合するだけでなく、朝鮮王朝期に描かれた『天下図』においても『山海経』の形式（海と大陸が多重の同心円構造を形成している）や内容（毛人国、小人国、三首国など記載）との継承関係を確認することができる<sup>25</sup>。『山海経』の朝鮮文化に対するはかり知れない影響を理解することができる。

上述のとおり、朝鮮に伝播した儒学は讖緯卜筮の影響を大きく受け、研究者のなかには「早い段階で朝鮮に伝播した儒学の最大の特徴」は災異巫卜に対する強い関心であるとする者もいる。そのように『山海経』は災異符応を含み、かつまた正確に朝鮮地理を記述しているという理由によって、朝鮮では早くから正統的な地位を確立した。それゆえ、儒家思想に対する強い親近感を有する朝鮮の読書人は、『山海経』を『易経』など儒家の経典と同一視した。したがって、朝鮮の学者たちが同じ経典

としての『山海経』に対して、劉向や劉歆父子の「怪物」を符応とみなす見解を継承したのは、ある意味で当然のことであったのである。実際に『天地瑞祥志』を例として言えば、薩守真は「太史」という官職とそれに伴う職責を担った以上、必ずや災祥符応のことに精通し、『山海経』を含む古来の禎祥の書を熟読していたはずである。唐代の太史令の職務は「天文を觀察し、歷數を稽定するを掌る。凡そ日月星辰の変、風雲氣色の異あれば、其の属を率いて占候す」、または「毎季、見る所の災祥を録して門下中書省に送り、起居注に入る」ということであった。しかも新羅は智証王時代から中国の制度をまねて国を治め、朝鮮半島を統一した後は更に唐朝の官制を全面的に手本としていたのである。『天地瑞祥志』は「瑞祥」に焦点をあてて、古今の災異祥瑞現象を集めた専門的な書物であり、この方面の知識ならびに文献はそのすべてを収録し、遺漏のないことを期した。したがって、『山海経』へ強い関心を払い、その影響を受けたということは道理にかなっている。郭璞による『山海経』の注釈は、早い段階で新羅に伝わっていたが、朝鮮儒学の特徴、『山海経』の内容、薩守真の持つ知識の構成、『天地瑞祥志』の執筆意図、こうした要因によって、『天地瑞祥志』は郭璞以前と同様に『山海経』に記載された鳥獸を国家の吉凶禍福を左右する「瑞祥」として理解しようとした。それゆえ、『山海経』は朝鮮においては、中国と異なり、経世致用を旨として受容されていったのである。

## おわりに

『山海経』の受容と伝播という問題を考察しようとする、唐初という時期、さらには新羅という地域について、非常に大きな研究上の空白

が存在している。しかし、『山海経』を引用している『天地瑞祥志』は、この問題を解決するための直接的な材料とすることができず、『天地瑞祥志』は『山海経』だけに記されている複数の「怪物」を「禽惣載」や「兽惣載」に収めているだけではなく、『山海経』本文に記載されたそれらの名称、容貌、習性、出現した場所と祥瑞の効果をそのまま保存しており、司馬遷が「敢えて言わず」とした「怪物」を符応の体系に取り込んでいる。魏晋時代の思想の影響を受けた同じ時期の唐代の読者に較べると、朝鮮の『山海経』学者は郭璞や酈道元のように自然主義の観点から『山海経』を研究することはなく、劉向、劉歆といった漢代の学者と同様の符応の思想を取り入れ、中国の学者によって動物と見なされた「鳥獸」を、国家の命運を左右する「瑞祥」とした。

『天地瑞祥志』の『山海経』に対するこうした比較的独自の受容態度は、朝鮮の学界の特殊性、すなわち、その写実性と權威が『山海経』を朝鮮において儒家經典と同列のものとして受容させることとなり、同時に朝鮮の儒学は符応思想の影響を受けていたという事情によっていた。さらにまた、この書が編纂された背景、すなわち符応の知識に精通していた太史が皇帝の権力を守るために、歴代の災異祥瑞を集めようとした事情にもよっていた。要するに、『天地瑞祥志』において『山海経』の「怪物」がその「個性を大いに發揮」しているという事実によって、我々は以下のことを発見することができたのである。すなわち、『山海経』の受容史は、東アジア諸国の思想史、ならびに文化交流史と深い関わりがあり、その豊かな内容は現代の研究者によって、より広い視野でさらなる発掘と整理が行ななければならない。

1 薄樹人編『中国科学技術典籍通匯』天文卷第四冊、大象出版社、一九九三年。  
高柯立編『稀見唐代天文史料三種・下』国家図書館出版社、二〇一一年。いずれも昭和七年本に拠っている。

2 高柯立編『稀見唐代天文史料三種・下』国家図書館出版社、二〇一一年。小論に引用する『天地瑞祥志』は『稀見唐代天文史料三種』に収録された京都大学昭和七年本による。

3 水口乾記、陳小法「日本所藏唐代佚書『天地瑞祥』志略述」『文獻』第一号、二〇〇七年。

4 中村璋八『日本陰陽道書の研究』汲古書院、一九八五年。

5 游自勇「稀見唐代天文史料三種」前言、高柯立編『稀見唐代天文史料三種・下』国家図書館出版社、二〇一一年。太田晶二郎「『天地瑞祥志』略説」附けたり、所引の唐令佚文」『東京大学史料編纂所報』第七号、一九七二。

6 趙益、金程宇「『天地瑞祥志』若干重要問題的再探討」『南京大学学報』第三号、二〇一二年。

7 注6論文参照。

8 『日本国見在書目録』は、本書と『天文要録』を同じ天文部に著録している。石川県の加越能文庫本は『天文要録』、『六閔記』とあわせて一冊の書物として伝存している。薄樹人氏はこの書を『中国科学技術典籍通匯』天文卷に収め、国家図書館出版社も「稀見唐代天文史料」として、『天文要録』、『譙子五行志』とあわせて影印出版している。いずれにおいても中国古代の天文学に関する資料として扱われている。

9 高柯立編『稀見唐代天文史料三種・下』国家図書館出版社、二〇一一年。

10 趙益、金程宇「『天地瑞祥志』若干重要問題的再探討」『南京大学学報』第三号、二〇一二年。

- 11 中村璋八『日本陰陽道書の研究』汲古書院、一九八五年。
- 12 引用書については『日本陰陽道書の研究』の「天地瑞祥志引書索引」よった。
- 13 ほかの六項目は『樂斗図』の三条（発明・焦明・幽昌）、『瑞応図』の二条（吉利・富貴）、『異物志』（世樂）の二条である。
- 14 ほかの五項目は『瑞応図』の四条（聲・白沢・周巾・角端）、『河図說徴示』の一条（狸）である。
- 15 たとえば『山海経』の「其名自号」を「其名曰号」とし、「其邑有訛火」を「其邑有訛哭之」とし、「長右」を「長舌」とし、ならびに郭璞の註を『山海経』の原文として引用していることもある。
- 16 劉捷「『五藏山経』神霊体系的構成與信仰記憶的博弈」華東師範大学修士論文、二〇一一年。
- 17 『漢書』藝文志
- 18 その中『山海経』の研究で有名であるのは東方朔、董仲舒、劉向である。
- 19 高柯立編『稀見唐代天文史料三種・下』国家図書館出版社、二〇一一年。
- 20 同上
- 21 『後漢書』循吏列傳
- 22 李泰等著、賀次君輯校『括地志輯校』、中華書局、一九八〇年。
- 23 劉宗迪「古代朝鮮の世界觀與『山海経』…以朝鮮王朝時期『天下図』為中心」『民族文化論叢』第四十六輯、嶺南大学民族文化研究所、二〇一〇年。
- 24 『史記』宋微子世家には「是に于いて武王乃ち箕子を朝鮮に封じ、而して臣とせざるなり。其の後、箕子、周に朝せり」とある。
- 25 劉宗迪「古代朝鮮の世界觀與『山海経』…以朝鮮王朝時期『天下図』為中心」『民族文化論叢』第四十六輯、嶺南大学民族文化研究所、二〇一〇年。